

呼応一致について —日韓両国語の助数詞結合—

城田 俊*
李 芝賢**

On the Agreement in Japanese and Korean

SHIROTA Shun
YI JiHyun

<要旨>

어 (語) 와 어가 결합하는 방법에는 지배・부착・호응일치가 있다. 지배란 A어 (지배하는 말) 가 B어 (지배되는 말) 에 대해 일정한 형태를 요구하는 것을 말한다. 즉, B가 그 요구에 응해 일정한 형태를 제공하는 것이다. 부착은 A어에 B어를 단지 인접해 두는 것이며 호응일치는 A어・B어가 내용상의 요소를 일치시킴으로써 연결되어 있음을 나타내는 것이다. 인도유럽어에서는 호응일치가 널리 통용되고 있는데 한일양언어에서는 일반적으로 사용되지 않는다고 보아왔다. 그러나 조수사와 명사의 결합 (4人の学生, 5匹の犬), 존경어와 가격 명사 (先生がおっしゃった)・비가격 명사 (先生にさしあげた) 의 결합, 칭찬어와 칭찬내포어의 결합 (玉を転がす美声), 부정강조어와 부형형 또는 부정내포어와의 결합 (全く考えない, 全く違う, 少しも考えない) 에도 호응일치라고 할 수 있는 의미요소의 반복이 인정된다. 또한 (たらちねの母) 와 같은 마쿠라코토바 (枕詞) 와 특정 명사의 결합도 호응일치에 가까운 현상이며 반복은 리듬을 형성하여 구성체에 안정성・항상성을 부여한다.

* 本学名誉教授

** 明知大学、日語日文学科、非常勤講師

I 語はいかにして結びつくか

1. 単語（以下、語と略称）は、基本的に（少なくとも個人において）有限であるが、文は人によって無限に生成される。有限の語によって無限の文が生成されるのは、語と語が結びつき、組み合わせるからである。人は語を組み合わせ、文をつくり、心の中に生起する思いを含め、千変万化する無限の事象に対応する。

語は文中にただあるだけでは事象を表わすことができない。どの語がどの語にいかなる関係で結びついているかを表示しなければ文によって事象を表わすことができない。また、人は文を理解することができない。では、語はどのような手段で他の語と結びつき、結びつく語といかなる関係に立つかを表わすのであろうか。

2. 主要な手段としてまずあげられるのが、支配・付着・呼応一致である。
3. 支配とは、A. 強者（支配する語）が、B. 弱者（支配される語）に一定のかたちを要求し、Bがそれに応えることである。この手段はAがBに結びついているだけでなく、両者がいかなる関係で結びつくかを示すことができる。支配は、文の骨格を形成する最重要手段である。

(1) 私は本を読む。(2) 나는 책을 읽는다. (3) I read a book.

(4) Я читаю книгу.

上掲4例中、読む [(1)]、읽는다 [(2)]、read [(3)]、читаю [(4)] は支配する語である。私 (ハで取り立てられているが本来はガ)・本 (を) [(1)]、나는・책을 [(2)]、I・a book [(3)]、Я・книгу [(4)] は支配される語である。「読む」では主体を示す語がガ格に、客体を示す語がヲ格に立つことを要求する。これによって、「読む」「私」「本」が結びつくだけではなく、「読む」という事柄（書かれたものを見て、内容を理解する）と「私」と「本」がいかなる関係にあるかを示す。readでは主体を示す語が前に立ち、客体を示す語が後に立つことを要求する。これによって、3語が結びつくだけではなく、readという事柄とIとa bookがいかなる関係にあるかを示す。읽는다は主体を示す語が「ガ格」に、客体を示す語が「을格」に立つことを要求する。これによって各語が結びつくだけではなく、읽는다が示す事柄と나と책がいかな

る関係にあるかを示すことができる。читать では主体を示す語が主格に、客体を示す語が対格に立つことを要求する。これによって 3 語が結びつくだけでなく、Я и книга がいかなる関係にあるかを示す。

4. 付着とは、語の品詞としての特性を生かしながら隣接して置くだけのことである。簡単な例は、いわゆる「副詞」と用言（動詞・形容詞・「副詞」）の結合である。

(5) とてもいい (6) 아주 좋다 (7) very well (8) очень хорошо

個別の説明の要はないであろう。「副詞」が被修飾語に隣接しているだけのことである。(9) ラジオ東京、県中央 (10) 라디오도쿄, 현중앙なども付着の一種である。このように付着は複合語形成へと向かう((10) ケ^ㄱンチュウオウはアクセント上 2 語。ラジオト^ㄷウキョウはアクセント上 1 語)。New York City (ニューヨーク市)、город Москва (モスクワ市) の例を見るだけで同じ付着であることはただちに了解されることと思われる。

5. 呼応一致とは、A 語・B 語が内容¹⁾上の要素を一致させることによって結びついていることを示す手法である。ここでは例をドイツ語にとるが、この手法は英語では欠くとしても印欧諸語で広く用いられる。

interessanter Text 面白いテキスト 재미있는 교과서 (形容詞男性形・男性名詞)、interessante Geschichte 面白いお話し 재미있는 이야기 (形容詞女性形・女性名詞)、interessantes Buch 面白い本 재미있는 책 (形容詞中性形・中性名詞)。

例でわかる通り、名詞が「男性」という意味要素²⁾(内容であり、決して外容ではない)を持っていると、結びつく形容詞もそれに従って男性という外容を出し、その形容詞も同じ意味要素を持つ、つまり、両

1) 2 参照

2) 言語には、外容と内容しかない。外容とは音声上のかたちである。その音声上のかたちが表わすのが内容である。内容は意味といってもよい。印欧語の名詞の類別である男性・女性・中性という「性」も内容である。それは極めて形式化され、文法の指標としてしか使われなくても、音声上の外容が示すものである限り内容である。「性」が文法上の指標だけでなく、意味を持つことは、ロシア語などで女性であることを明示する場合、女性名詞としてかたちづくられることからわかる。

語が男性という同一の意味要素を共有することによって相互に結びつくことを示す手法である。名詞が女性なら、形容詞も女性、名詞が中性なら形容詞も中性、というかたちで、同一意味要素が反復され、共有される。

6. 支配と付着は日韓両語で広く認められるところである。しかし、呼応一致は両国語で認められないというのが一般常識となっている。たしかに、ドイツ語の例に付した訳語では同じような呼応一致は見出されない。見出されるのは、語の特性（形容詞と名詞）に頼っての付着でしかない。しかし、いかなる水準においても呼応一致はないといえるかどうか、本稿では助数詞をとりあげ、その常識を疑ってみることにする。

II 助数詞

1. 学生をかぞえる場合は「り」や「人（にん）」を使わなければならない。犬は普通「匹」でかんじょうされる。ライオンのような大きな動物は「頭」を用いてかぞえなければならない。紙のような薄いものは「枚」が用いられる。
 - (11) 4人の学生が正門の所で私を迎えてくれた。
 - (12) 5匹の犬が走っていった。
 - (13) 10頭のライオンが船で運ばれてきた。
 - (14) 面接では私に2枚の紙が渡された。

このことは韓国語でも同様である（中国語などでも見られる現象であるが、ここでは日韓両語に話を限る）。

2. 英語やロシア語などでは、four students, четыре студента（4人の学生）、five dogs, пять собак（5匹の犬）、ten lions, десять львов（10頭のライオン）のように、名詞に数詞を前接すれば名詞が示すものの数を表わすことができる³⁾。それに対し、日韓両国語では、数えられるものの意味カテゴリーに従って助数詞が選択され、それがないと数量を自然に表わすことができず、表現が不適格となる。4学生、5犬、10ライオンは通常用いられない⁴⁾。

- (15) 4 명의 학생 (학생 4명) 이 정문에서 나를 맞아 주었다.
 (16) 5 마리의 개 (개 5 마리) 가 달려왔다.
 (17) 10마리의 사자 (사자 10마리) 가 배로 실려 왔다.
 (18) 면접에서 나는 2 장의 종이 (종이 2 장) 를 받았다.

3. 「人」なら「り」「人(にん)」[(11)], 人が抱ける程度の動物なら「匹」[(12)], それ以上なら「頭」[(13)], 薄いものなら「枚」[(14)] が用いられるということは、名詞が意味カテゴリーによって分類されており、その分類に従って異なる助数詞が選択されることを示す。「명」[(15)]「마리」[(16)]「마리 (두)」[(17)]「장」[(18)] においても同様である。この点、印欧語の「性」に従っての形容詞のかたちの選択によく似る。その相似の様子を図示すれば以下ようになる (ブラケット内は意味要素。【 】は決定的要素、[] は服従的要素)。

a ドイツ語

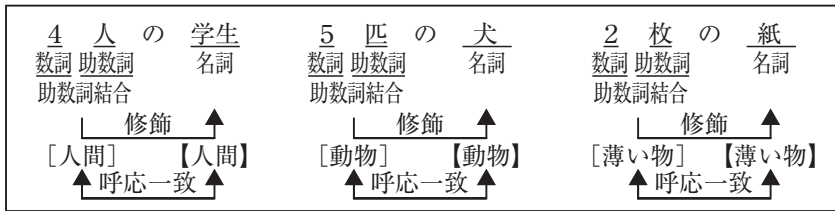


- 3) 印欧語にも助数詞といえるものは、あるにはある。a pair of shoes 靴 1 足、two cakes of soap 石けん 2 個、three sheets of paper 紙 3 枚、six head of deer 鹿 6 頭、a fleet of 30 sail 30 隻からなる艦隊 - 以上英語。пара чулок 靴下 1 足、пять человек 5 人、шесть голов 家畜 6 頭、семь штук 7 個、восемь голосов 8 票 - 以上ロシア語。

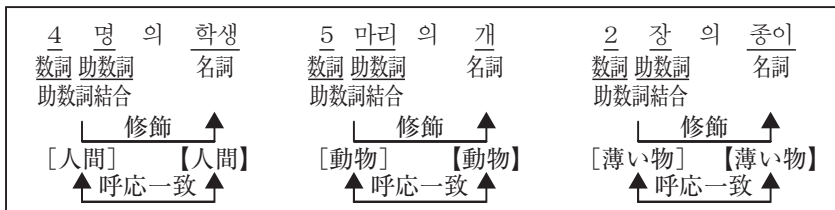
ただし、これら助数詞は、日本語の助数詞とことなり、はっきりとした名詞である。アクセントを 1 つ持ち、独立した語である (日本語では助数詞はアクセント上独立せず、数詞に結びついて 1 語をなす。イッピキ、ニヒキ、サンビキ、ヨンヒキ、ゴヒキ、ロッピキ...)。また、これら言語では助数詞の使用は義務的ではない。

- 4) 日韓両国語でも数詞が数詞だけで独立する語として用いられることは勿論ある。算数などが好例である。2 + 5 = 7 (니타스ゴハ나나)、5 対 4 (고타이ヨン) で負けた。2 + 5 = 7 (이 더하기 오는 칠)、5 対 4 で負けた (오대사로 졌다)。

b 日本語



c 韓国語



図でわかる通り、意味要素には決定的立場にあるものと、服従的立場にあるものがあり、前者に後者が服従するかたちで同じ意味要素を反復する。ドイツ語の形容詞による名詞の修飾においては、名詞の性が決定要素であり、形容詞の性は服従要素である。日本語・韓国語の数詞・助数詞結合による名詞の修飾において、名詞の意味が決定要素であり、助数詞は服従要素である。ドイツ語において形容詞＋名詞が通常の語順とすれば、逆行同化⁵⁾である。日本語・韓国語の場合、表示した例では逆行同化である（後にある「犬」が前にある「匹」を決定する）が、「犬が5匹走っていった」5마리의 개 (개 5마리)가 달려갔다のような用法では進行同化⁶⁾となる（前にある「犬」「개」が後にある「匹」「마리」を決定する）。

4. しかし、重要な差異がある。相互に重なる所がでるが、主な相違点をあげてみよう。

(1) 印欧語の「性」は3ないし2類別であるが、日韓両国語の助数詞から

5) 音声学の用語を用いれば regressive assimilation

6) progressive assimilation

見られる名詞の類別は全くルーズであり、いくつあるか不明である。日本語では「明治初期の新聞の用語」で249種、『明解国語辞典』で250種、『大言海』で123種の助数詞があるという（見坊, 1965による）。韓国語では、例えば우형식（2001:116）で、外来語を除く助数詞465種を提示している。両言語とも多数で多様な助数詞が存在することは確かである。しかし、これだけ名詞に類別があるというわけではないし、また、これだけ日本語話者・韓国語話者が使いこなしているというわけでもない。

類別がルーズで、多い、ということは時代によって助数詞の出入りが激しいことを示す。例えば、にぎりずしを数える「貫（かん）」は古くからあったとしても、多くの人によって使われだしたのは最近のことのように思われる。いくつあるのか、名詞の類別がどのように組織づけられているのか、という設問自身が誤っているような、数の多さと、時代による出入りの激しさと、個人による使用の違いがある存在が助数詞である。

- (2) 助数詞には微妙な使いわけがあることも見落せない。たとえば、「人（にん）」「名（めい）」を辞書で引くと、共に「人数を数えるのに用いる」（『大辞泉』）とでる。全く同義のはずであるが、「ご兄弟は（何人ですか）？」と問われたら、「3名です」と答える人はまずいないであろう。「3人です」が適切な答えである（これは次に触れる文体に関係する事柄かもしれない）。

タコ・イカなどは「3匹」ともいえるし、「3杯（さんぱい）」も使われる。しかし、タイは「3杯」とはいえない。ウサギは鳥と同じく「3羽（さんば）」と数えられるが、モルモットには「羽」は使えない。職業集団によっても特別の助数詞が使われる傾向がある。店の人は「てんどん一丁あがり」というが、客は「てんどん一つ下さい」と注文する。このようなことは「性」ではおこり得ない。

- (3) 名詞の「性」が文体によって異なるということは少数の例外を除きないが、助数詞は文体で異なる用い方をする。「火災で6戸が全焼した」は書きことばであるが、話しことばでは「火事で6軒がまるやけだった」となるであろう。「2柱（ふたはしら）の神」などは書きことばでしか見出されない。話しことばでは「2人の神様」のようにいう人が多いのではない。
- (4) 名詞の「性」にゆれは例外を除きないが、助数詞のゆれは一般的現

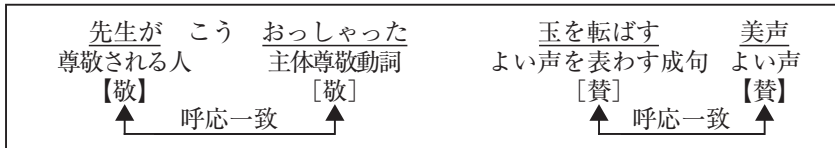
象である。ミカンを「1個」とかんじょうすることも、「1つ」とかぞえることもできる。「1粒」といっても間違いではない。どれを選ぶか、その時の気分次第といっても過言ではないかもしれない（韓国語の場合、「1(한)알」といえば、ミカン、まるごと「1個」を意味するより、皮をむいてその「中身の一つ」をいう。日本語では「1房」にあたる）。

- (5) 助数詞には、和語数詞（例、「り」「つ」「組(くみ)」「切れ」など）、漢語数詞（「枚」「本」「台」「着」など）、外来語数詞（「ページ」「レーン」など）の発生源からの区別があるが、「性」は発生源などとは関係なく、文法構造の根幹に根付くものである。また、助数詞には、よく、かつ、広く用いられる「つ」や「個」など汎用的なものと、「振り」「貫」など刀剣のみ、にぎりずしのみ用いられる個性的なものがある。「性」には汎用的・個性的などの区別は全くない。

以上、思いつくまま記したことでわかる通り、日韓両国語の助数詞は語彙に属し、厳密な文法的性質を持たない。「性」とはかけはなれた存在である。しかし、ものを数える場合、助数詞を使わなければならない。この義務性において文法的性質（規則性）を帯びる。助数詞は語彙と文法のはざまにある存在である（どちらかといえば語彙に傾く）。

Ⅲ その他の呼応一致

1. 呼応一致現象が助数詞結合にみとめられることを指摘したが、助数詞結合に限られるわけではない。「先生がこうおっしゃった」のようないわゆる尊敬語にも呼応一致現象がみとめられる。これは正に文法の水準に現れる呼応一致である。また、「三国一の幸せ者」「水も滴るいい男／女」「玉を転ばす美声」のような称赞語と称赞内包語の結合にも語彙の水準で呼応一致が認められる。



図でわかるように、このような結合は「たらちねの母／親」「あしひ

きの山／岩」「ひさかたの天／空」のような枕詞と特定の名詞の結合にきわめて似る。「たらちねの」と聞けば次に「母」ないし「親」がくることが予測され、「玉を転ばす」と聞けば次に「美声」ないしそれに類する語が期待される。水準は異なるが、ある単位が他の単位に結びついていることを示す機能においては同じである。

2. 否定強調語と否定語との間にもまた、意味要素の反復が認められる。

そんなことは <u>全く</u> <u>考えない</u> 否定強調語 動詞否定形 [否定] 【否定】 ↑呼応一致↑	二人の性格は <u>全く</u> <u>違う</u> 否定強調語 動詞否定内包語 [否定] 【否定】 ↑呼応一致↑
そんなことは <u>少しも</u> <u>考えない</u> 否定強調語 動詞 否定形 [否定] 【否定】 ↑呼応一致↑	二人の性格は <u>少しも</u> <u>違わない</u> （‘違う’） 否定強調語 動詞 否定形 [否定] 【否定】 ↑呼応一致↑

否定強調語（「全く」「少しも」）は否定の意味要素を持つ語とのみ結合する。持たない語との結合は誤用となる（*それは全くいい。*少しも勉強する）。「違う」というのは「同じではない」という意味で語の意味に否定の要素がある。このような語を否定内包語と呼ぶ。否定内包語は否定強調語「全く」と呼応して用いることができる。

興味深いのは否定強調語には、形態的な否定形とのみ結合し、否定内包語とは結合しないものと、形態的な否定形とも否定内包語とも結合することができるものがあることである。「少しも」は「考えない」（動詞否定形）とは結合できるが、「違う」（否定内包語）とは結合できない。「違う」を使おうとするなら「違わない」と否定形にしなければならない。否定強調語には否定意強調語と否定形強調語があることがわかる。前者は意味に否定要素があれば呼応するが、後者は否定が文法形態によって支えられないと呼応できない。

IV おわりに

1. 呼応一致とは意味要素の継時的「反復」である（上記図参照）。「反復」

は（音楽の例をひくまでもなく）リズム形成であり、構成体に安定性・恒常性をもたらす（無限を志向する）。要素の「反復」は時に剰余視され、擲揄の対象となったりするが（よい例が、「頭痛が痛い」「馬から落馬する」のようないわゆる「重ね言葉」）、助数詞、尊敬語、称賛語、否定強調語、枕詞の結合から見れば、文展開の重要手段であり、文芸の手法の1つとして使われていることがわかる。

2. 語が文中で、いかなる力によって結合するかという力学上の問題は、まだ日本語・韓国語文法研究において本格的探求がなされていないのではない。ここでは、支配・付着・呼応一致をあげたが、まだ、他の結合手段はあるかもしれない。本稿は、この力学上の問題の研究の先鞭となれば幸いである。

【参考文献】

- 見坊豪紀（1965）「現代の助数詞」『言語生活』166号
城田俊（1991）『ことばの縁－構造語彙論の試み』リベルタ出版, pp.158-164
우형식의（2005）『한일 양어 수분류사의 명사 부류화 기능에 관한 대조적 연구（日韓両国語における助数詞の名詞分類機能に関する対照研究）』제이앤씨, pp.9-292
이지현（2014）「한일 양언어의 조수사에 관한 고찰（日韓両国語の助数詞に関する考察）」『일본언어문화（日本言語文化）』27, 한국일본언어문화학회（韓国日本言語文化学会）, pp.435-454